

## W-6-3 疑問・不定表現における韻律的現象の通時的考察\*

中澤 光平 (東京大学)

kohein@l.u-tokyo.ac.jp

### 1. はじめに

日琉諸語には「誰, 何, いつ」などの不定語を含む疑問・不定表現にアクセント交替などの様々な韻律的現象が観察される。本発表では, 疑問・不定表現の韻律的交替がどのようにして成立したかの通時的考察を, 発表者の調査データをもとに行う。

### 2. 問題の所在

佐藤 (2019) に示されているように, 日本語諸方言には「誰, 何, いつ」などの不定語 (疑問詞) および不定語を含む疑問・不定表現において, アクセント交替などの韻律的現象が広く観察される。

- (1) a. 東京: 「誰」ダレ HL<sup>1</sup> → ダレモ LHH, ダレデモ LHHH      1 型 → 0 型  
b. 長崎: 「誰」ダイ HL → ダイカ LHH, ダイニモ LHHH      A 型 → B 型

(佐藤 2019)

佐藤 (2019) では東京, 福岡, 長崎, 鹿児島の方言が取り上げられているが, 中井 (2002) でダレ「誰」が「～が来る, ～を呼ぶ」で H0 [HH], 「～でも良い, ～も来ない」で L0 [LH] となると記述されているように, 京都方言などの京阪式諸方言にも不定語のアクセント交替が見られるほか, 壱岐方言にも類似の現象が観察される (中澤 2017) など, 疑問・不定表現の韻律的現象は日本語諸方言に相当広く見られる可能性がある。一方で, 琉球諸語については管見の限りこれまで報告がなく, 同現象の成立過程などの通時的考察も試みられていないようである。

疑問・不定表現の韻律的現象が琉球諸語を含む日琉諸語に広く観察されるとすれば, それは日琉祖語に遡る特徴なのだろうか。それとも, 諸方言で独立に獲得された特徴なのだろうか。これらについては明らかにされていない。

そのため, 本発表では, 不定語を含む疑問・不定表現の韻律的現象について, 琉球諸語を含む日琉諸語について広く調査し, 調査データをもとに疑問・不定表現の韻律的現象の成立過程などの通時的考察を試みる。

### 3. 調査概要

本節では, 本発表で扱うデータに関する調査の概要についてまとめる。

---

\* 本研究は次の研究成果の一部である: 国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」(代表: 窪蘭晴夫), 同「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」(代表: 木部暢子), MEXT 新学術領域研究(研究領域提案型)「南海道諸方言の歴史言語学的研究と方言形成時期の推定」(研究課題: 21H00354) および JSPS 若手研究「日本語諸方言の接触地域における系統関係の解明」(研究課題: 21K12993)

調査に関して, 次の方々にお世話になりました。お礼申し上げます。

池上壽一, 植田珂子, 大亦千佳, 奥村静子, 小西いずみ, 崎原用能, 谷脇輝彦, 田村昭久, 鳥巢修, 西浦千万太, 林久美, 藤川修身, 藤本眞事, 正井良徳, 山中信子 (五十音順。敬称略)

<sup>1</sup> 高い音調を H, 低い音調を L で表す。

### 3.1 調査地点

本発表では次の地点の方言の調査結果を報告する。

- (2) 東京, 富山市, 京都市, 京丹後市, 田辺市<sup>たなべ</sup>, 淡路島 (淡路市, 洲本市, 南あわじ市), 備前市 (日生<sup>ひなせ</sup>, 寒河<sup>そうご</sup>), 瀬戸内市, 観音寺市<sup>かんのんじ</sup>, 松山市, 南国市<sup>なんごく</sup>, 壱岐市, 与那国島

### 3.2 調査方法

発表者が用意した調査票の読み上げ調査による。ただし、方言として自然になるように、助詞や文末詞を適宜改めた。与那国島については日本語ではなくはじめから与那国島方言の形で調査した。

### 3.3 調査項目

不定語については次のものを調査した。与那国島方言については形式が大きく異なるため、対応する方言形を併記した<sup>2</sup>。

- (3) 何時 (イツ; iCi), 誰 (ダレ; ta), どう (ドー; nugusiTi), 何処 (ドコ; Nma), どれ (ドレ; Ndi), 何故 (ナゼ; nuNdi), 何 (ナニ; nu), 幾つ (イクツ; iguCi), 幾ら (イクラ; iguraTi), どない (ドナイ; nuNni), なんで (ナンデ), なんぼ (ナンボ), どうして (ドーシテ)

調査した粹文は次の通りである。

- |        |         |                                      |
|--------|---------|--------------------------------------|
| (4) a. | 直接疑問文   | 不定語 + コピュラ (例: 誰だ)                   |
|        |         | 不定語 (+ 格助詞) … (例: 誰がいる)              |
| b.     | 全称量化不定文 | 不定語 (+ 格助詞) + も … (例: 誰もいない)         |
|        |         | 不定語 (+ 格助詞) + でも … (例: 誰にでも優しい)      |
|        |         | 不定語 + の … でも … (例: 誰のものでもない)         |
|        |         | 不定語 (+ 格助詞) … も … (例: どこまで行っても変わらない) |
| c.     | 譲歩文     | 不定語 + でも … (例: 誰でもいい)                |
|        |         | 不定語 (+ 格助詞) … も … (例: 誰が食べてもいい)      |
| d.     | 間接疑問文   | 不定語 (+ 格助詞) … か … (例: 誰がしたか知らない)     |
| e.     | 存在量化不定文 | 不定語 + か … (例: 誰かいる)                  |

(4a, b, c) については全地点で調査し, (4d, e) は東京, 富山市, 淡路島, 備前市日生, 南国市, 与那国島で調査した。

### 3.4 調査期間

2016年11月~2021年10月 (2020年4月~2021年9月は調査なし) に断続的に行った。

<sup>2</sup> 与那国島方言の音素目録は次の通り: /a, i, u/ (母音), /p, b, m, t, d, n, T, r, s, C [tsʔ] ~ [tʔ], k, g, ŋ, K, h, j, w/ (子音), /N/ (撥音)。撥音以外の大文字の子音は無気喉頭化音を表す。

#### 4. 結果

(4a) の調査結果から、不定語のアクセントに語彙的な対立が見られる方言と見られない方言がある。

- (5) a. 対立あり…富山市, 京都市, 京丹後市, 田辺市, 淡路島, 備前市寒河, 南国市, 与那国島  
 b. 対立なし…東京, 備前市日生, 瀬戸内市, 観音寺市, 松山市, 壱岐市

対立がない方言には、東京のように1つの型のみの方言と、日生のように揺れが見られる方言がある。

- (6) a. 東京の例…「何時」HL, 「誰」HL, 「どう」HL, 「何」HL, 「幾つ」HLL, 「幾ら」HLL, …  
 b. 日生の例…「何時」HL~LH, 「誰」HL~LH, 「何」HL~LH, 「なんで」HLL~LHH, …<sup>3</sup>

(4) の文タイプ間で不定語のアクセント型に交替が見られる方言と見られない方言がある。

- (7) a. 交替あり…東京, 京都市, 京丹後市, 田辺市, 淡路島, 寒河, 南国市, 壱岐市, 与那国島  
 b. 交替なし…富山市, 日生, 瀬戸内市, 観音寺市, 松山市

各方言のアクセント体系および疑問・不定表現のアクセント交替は次のようにまとめられる。

表 1 調査対象の方言のアクセント体系と交替形

アクセント体系 \ 方言と交替形	該当する方言	交替形 (ある場合)
下げ核 <sup>4</sup>	東京, 富山市, 京丹後市, 備前市, 瀬戸内市, 壱岐市	0 型
2 式 <sup>5</sup> と下げ核	京都市, 田辺市, 淡路島, 観音寺市, 松山市, 南国市	L0 型
3 型 <sup>6</sup>	与那国島	A 型

- (8) a. 京丹後市の交替例…「何」HL (1 型), ナニモ LHL, ナンデモ LHHL (0 型)  
 b. 与那国島の交替例…「何」nu (C 型), 「何も」nuN (A 型), 「何でも」nu arubaN<sup>7</sup>

また、交替が起きる領域も方言によって異なる。東京では文節自体が 0 型に交替するのに対し、淡路島では不定語のみ L0 型に交替する。

- (9) a. 東京の交替例…「誰」HL, ダレデモ LHHH (cf. 「此」コレ LH, コレデモ LHHL) <sup>7</sup>

<sup>3</sup> 馬瀬編 (1994) でも、広島市方言で日生のような揺れが (話者間ではあるが) 見られることを示唆している。日生の場合、「幾つ」LHL と「幾ら」LHH のように 3 拍以上の不定語では対立が見られ、2 拍語でも「何処」は HL で発音されやすいなどはあるが、「幾つ」と「幾ら」は「なんぼ」が本来の言い方と思われることなどをふまえ対立なしに分類した。

<sup>4</sup> 「次を下げようとする力」(上野 1992: 11)。語頭から数えた核のある拍の位置を数字 (核が無い場合は 0) で表す。

<sup>5</sup> 相対的に高く始まる式を H 式, 低く始まる式を L 式とし、アクセント型ではそれぞれ H, L で表す。音調の H, L と紛らわしいが、型の場合は式は後ろに必ず数字を伴うことで区別される。

<sup>6</sup> 下降なしの型を A 型, 低平調を B 型, 文節末に下降をもつ型を C 型と表す (上野 2010)。

<sup>7</sup> ただし、平山編 (1960) には「何にも」ナンニモ LHHH, 「何でも無い」ナンデモナイ LHHHHL に対して「何時でも」イツデモ HLLL, LHHL となっていて、イツデモ LHHL は文節ではなく語レベルでの 0 型化が東京でもかつてはあったことを示唆していると思われる。

- b. 淡路島の交替例…「誰」**HH**, ダレデモ **LLHL** (cf. 「今」イマ LH, イマデモ LLHL)

一方で、東京では文節を超えて 0 型化が見られることがあり、淡路でも文節単位で L0 型化している例も見られた。

- (10) a. 東京の交替例…「何処」**HL**, ドコノチームガカッテモ **LHHHHHHHHHHH**  
 b. 淡路島の交替例…「何処」**HH**, ドコマデ (イッテモ) **LLLL** (HHHL)

アクセント交替のある方言について、交替が生じる領域を文節以下か文節以上かで分けると次のようになる。

- (11) a. 文節以上…東京  
 b. 文節以下…京都市, 京丹後市, 田辺市, 淡路島, 備前市寒河, 南国市, 壱岐市, 与那国島

ほとんどの方言で、文節あるいはそれ以下での領域で音調の交替が生じている。

## 5. 通時的考察

前節の調査結果をふまえ、本節では通時的観点から考察を行う。

### 5.1 不定語アクセントの再建

不定語のアクセントには語彙的な対立が見られる方言と見られない方言があるが、対立のない方言では群化（上野 2002）によって不定語が同じアクセント型になったと考えられることと、音韻条件がない限り対立のない状態から対立のある状態へ変化するのは不自然なため、対立のある状態が古いと推定されることから、対立のある方言に基づいて祖語の不定語のアクセントが理論上再建できる。

表 2 日琉諸語における不定語のアクセント型の通時的対応

不定語 \ 方言	京都市	鹿児島	首里	与那国島	日琉祖語
何時	L0	B	① (?içi)	A, C	*LH
誰	H0	A	① (taa, taru)	A	*HH
どう	H0	A	— (①caa)	— (nugusiTi <sup>C</sup> )	*HH (?)
何処	H0	B	— (①maa)	— (Nma <sup>C</sup> )	*RH < *LHH
どれ	H0	A	① (ziru)	C	*RH < *LHH
何故	L0	A	— (①caa Qsi)	— (nuNdi <sup>C</sup> )	*LH (?)
何	L0	B	① (nuu)	C	*LH
幾つ	L2	B	① (?ikuçi)	A	*LHL
幾ら	L0	A	— (①caQsa)	— (iguraTi <sup>A</sup> )	*LHH
どない	H0	—	—	— (nuNni <sup>C</sup> )	*HHH (?)
なんで	L0	B	—	—	*LHH

なんぼ	L0	—	—	—	*LHH (?)
どうして	H0	A (HLLL)	— (①caasi)	—	*HHHL (?)

鹿児島は平山編 (1960), 首里は国立国語研究所編 (1963) より  
鹿児島 A, 首里①は下降あり。鹿児島 B, 首里②は下降なし。「—」はデータなし

実際に再建を試みると、ほぼ確実なのは「誰」\*HH, 「何」\*LH くらいで、他は何かしら問題がある。「幾つ」は恐らく\*LHL だが与那国島のように南琉球には高起式 (H 始まり) に対応するアクセントが見られる。「何時」は日本語に基づけば\*LH が再建されるが、琉球諸語では H 始まりに対応するアクセントが広く見られる。「何処」, 「どれ」は「いづこ」, 「いづれ」に遡り、本来は\*LH-だったと推定され、琉球諸語のアクセントも低起式 (L 始まり) を示唆する。「どう」, 「どない」, 「どうして」は「こう」 (< 斯く), 「そう」 (< 然) への類推で生じた新しい形式のため祖語には遡らない。「何故」, 「なんぼ」も「なにせむに」, 「なにほど」の変化した形とされるから、祖語に単純に再建することは難しい。「誰」, 「何」も、琉球諸語は日本語と分節音が異なり (\*taro, \*nawo か), 日本語のダレ (< タレ), ナニに対応させて良いか疑問もなくはない。このような問題は残るものの、「誰」と「何」のように、日琉祖語の不定語にアクセントの対立があったことは疑いないだろう。

## 5.2 不定語のアクセント交替の通時的考察

問題は多いものの、日琉諸語の比較によっていくつかの不定語のアクセントが再建できることを確認した。それでは、疑問・不定表現におけるアクセント交替は日琉諸語に再建されるだろうか。

疑問・不定表現におけるアクセント交替は日琉諸語に広く観察されるため、祖語に遡る特徴の可能性はある。しかし、各方言のアクセント交替を詳細に検討すると、共時的には類似していても通時的には対応関係が見られないことが分かる。

表 3 日琉諸語における不定語のアクセント交替の通時的対応

韻律現象	方言	東京	京都市	長崎市	多良間	与那国島
アクセント交替		0 型	L0	B 型	a 型	A 型
通時的対応		高起式	低起式	低起式	高起式	高起式
領域		文節以上	文節以下	文節以上	文節以下	文節以下

長崎市は佐藤, 多良間はセリックの本ワークショップ発表資料による

方言によってアクセント交替の通時的対応が異なるうえ、交替が起きる領域も異なる。(7b) のように交替を起こさない方言があることから、日琉諸語における疑問・不定表現におけるアクセント交替は日琉祖語に遡らず、各方言で並行的に発達した特徴であることが明らかである。もし諸方言で並行的に発達したとすれば、どのような動機で不定語の変化が生じたのだろうか。

不定語のアクセント交替が最もよく見られたのが (4b,c), 特に (4b) であったことから、通時的には「不定語+モ」の形式に生じた変化がきっかけとなったものと考えられる。それはこの形式が「すべての～」と全称量化して意味的に疑問の形式と切り離されることで、「不定語+モ」があたかも一語であるかのように音韻上語彙化したためと考える。

表3の諸方言について言えば、東京の0型は、「ネズミ」などの金田一語類の「兎」類（金田一 1974）や「見込む」などの前部有核複合動詞、「なくす」などと同様に、\*HLL>LHHと変化したため、京都市でのL0型は、3拍語のHHL型が避けられた結果\*HHL>LHLとなったと考える（cf. 中井 2002: 50, 奥村 1990: 612–613）。長崎市では「不定語+モ」に複合アクセント法則が適用されてもアクセント型が変わらないが、そのために「不定語+モ」を複合語と解釈する余地が生じ、より長い単位に適用されてB型化した。多良間と与那国島では、「不定語+モ」が一語化することで副詞相当の扱いを受け、これらの方言で副詞に多いa型、A型に変化したと考えられる。このように、各方言で現れる音調に通時的な対応はないものの、全称量化という共通の意味上の動機を有するため、並行的に変化したと推定する。

上記とは別に、(6b)の備前市日生のような状態から、別方向へ群化が生じた可能性もある。京都市のL0や与那国島のA型は、元々不定語に見られる型である（表3を参照）。東京も、不定語のアクセントが群化で1型に統合される前は、「誰」などが0型だったと推定されるから、(4a)と(4b,c)で、揺れている状態から異なる方向に群化が生じた結果とも考えられる。

- (12) 「誰」0型, 「誰も」0型 > 「誰」0~1型, 「誰も」0~1型 > 「誰」1型, 「誰も」0型  
「何」1型, 「何も」1型 > 「何」1~0型, 「何も」1~0型 > 「何」1型, 「何も」0型

その場合でも、「不定語+モ」が東京で0型に群化が生じた動機を考える必要がある。京都市のL0のように、必ずしも無核型に群化が生じているわけではないが、通方言的に平坦音調になる傾向がある。淡路の「昼」ヒルHL, 「前」マエHL → 「昼から」, 「前から」HHHHや「朝」アサLF → 「朝のうち」LLLHH, 「畑」ハタケLHL → 「畑の(土)」LLLL(HL), あるいは動詞の終止形と連体形のように、連体修飾、連用修飾の要素は平坦音調になりやすい、あるいは平坦音調になることで被修飾要素との結合を示しているとすれば、そのような平坦音調の機能が動機となっている可能性も考えられる。

## 6. まとめと課題

本発表では、発表者の調査データをもとに、日琉諸語の疑問・不定表現の韻律的現象の成立過程などの通時的考察を試み、音調交替が独立に生じたことと、共通の動機があった可能性について述べた。

変化に意味、機能が関わっているとすれば、次の2点をさらに検討する必要がある。1つは全称量化と意味上共通する「一つも」、「少しも」などとの関係で、富山市では不定語の音調交替はないものの、「一つも」、「少しも」は全体が0型化するなど、音調交替が先んじて生じているようである。また、南国市では助詞「も」では音調交替はほとんど見られず、同じ機能の助詞「ッチャー」で交替が見られる（南あわじ市もこれに近い）。変化がどこから生じる（生じやすい）かについては今後の課題としたい。

## 参考文献

- 上野善道 (1992) 「昇り核について」『音声学会会報』199: 1–14. / 上野善道 (2002) 「アクセント記述の方法」飛田良文・佐藤武義 (編) 『現代日本語講座3: 発音』163–186. / 上野善道 (2010) 「琉球与那国方言のアクセント資料(1)」『琉球の方言』34: 1–30. / 奥村三雄 (1990) 『方言国語史研究』東京: 東京堂出版. / 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』東京: 塙書房. / 国立国語研究所 (編) (1963) 『沖縄語辞典』東京: 大蔵省印刷局. / 佐藤久美子 (2019) 「不定語のアクセントと不定語を含む文のイントネーション—東京・福岡・鹿児島・長崎の対照—」Prosody & Grammar Festa 3 発表資料. / 中井幸比古 (編著) (2002) 『京阪系アクセント辞典』東京: 勉誠出版. / 中澤光平 (2017) 「壱岐勝本方言のアクセント体系とアクセント単位」日本音声学会第31回全国大会. / 平山輝男 (編) (1960) 『全国アクセント辞典』東京: 東京堂出版. / 馬瀬良雄 (編) (1994) 『広島市方言アクセント辞典』広島市: 中野出版企画.